

# 私の独り言 — 年少従孔子、年長親老子 — — 天と父の孔子、地と母の老子 —

大阪大学名誉教授

長谷川 晃

## 要旨

このタイトルは日本語では「若い頃には孔子に従い、熟年期に至っては老子に親しむ」と読んでいただきたい。日本人の書く漢文はよく日本語であって中国語ではないと言われるので、中国人が見ても分かるタイトルにした。これは滞電会での今年の卒業生への祝辞のタイトルである。祝辞を述べる機会は残念なことに震災でお流れになったが、この紙面を頂いて文書で卒業生への饒の言葉を述べることにしたい。人生いろんな送り方があるが、中国の古典を参考にすれば、私は若いときには孔子の教えがよく、熟年に達してからは老子に親しむのが良いと思っている。よく東洋思想として孔子と老子を挙げる人が多いが、この両者の基本的立場は全く違ったもので、孔子は父性文化、老子は母性文化を代表していると言える。実際孔子の考えは父性文化のユダヤ・キリスト教文化によく似ていて、孔子の「天」はキリスト教の神、「仁」はキリスト教の愛に通じる。一方、老子が謂う「天」は道、または自然であり、老子は「仁」を謂わない。

今回は論語の中から、論語卷第一 為政第二 四

「子曰、吾十有五而志乎學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」、及び、論語卷第七 子路第十三 二十三

「子曰、君子和而不同、小人同而不和」を紹介して若い人の為の人生教訓とし、続いて老子上篇 第一章「道可道、非常道、名可名、非常名、無名、天地之始、有名、万物之母、故常無欲、以觀其妙、常有欲、以觀其徼、此兩者、同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙乃門」、及び下篇 第八十一章（最終章）「信言不美、美言不信。善者不辨、辨者不善。知者不博、博者不知。聖人不積、既以為人、己愈有、既以與人、己愈多。天之道、利而不害、聖人之道、為而不爭」から熟年層の為に老子の面白さを紹介したい。

## 1. はじめに

先日薬師寺管主山田法胤氏が「日本は奈良時代から1300年の歴史があるが中国はまだ65歳だから、彼らのやる事にいちいち目くじらたてることはない」、と話しておられたが、けだしもっともであると感心した。実際今の中国政府の辞書には論語の「礼」「忠」「仁」「孝」「敬」「義」それに「君子」などの言葉はない。このことは今のギリシャは、紀元前のヘレニズムのころのギリシャとは全く別国であること、また、今のイタリア人はローマ人とは別人であることに似ている。文化というものはきちんと継承して初めてその国の文化になる。今の中国は八路軍が政権を取ってから65年、この間文化大革命と称し古典を完全に廃棄してしまった。更に言えば、それ以前の300年続いた清は、満州民族が支配した時代であるし、また11世紀の元では蒙古民族の支配下にあった。中国3000年と言っても実際には他民族の支配下にあたり、古典を抹殺したりして結果、今の中国は正に65歳である。日本の政治家が中国に一番求めなければならないのは「貴国はご自身の古典をもっと身につけられては」と言うことであろう。

これに引き換え日本では、孔子の儒教は武士道を通じて公のシステムに、老子の道徳教は神道や仏教、特に禅宗に引き継がれ日常の生活の中に継承されている。

日本に来る外国人は「日本は美しい」とよく言う。それは日本の自然が美しいというだけではなく、町がきれいであることを言う場合が多い。街全体の景観はパリ等に比べ決して美しいとは言えないが、道や駅など人の多く集まる場所の清掃が行き届いており、また、道歩く人々が清潔だからだ。こうした様子は宣教師のザビエルが古く16世紀に本国のポルトガルにそう報告している。実際日本語の「きれい」という言葉はcleanとbeautifulの両方の意味を持ち、日本では清潔なことが即ち美しいのである。街全体のプラン

ニングはごたごたしているのに、身の回りがきれいなのは、遠くが見えないが身の周りをきれいにしたいとする日本固有の母性文化の表れである。Clean equals beautiful の考えは神道から来ている。神道のお祓いの儀式はその表れだし、浄める水を大事にする考えもこれに通じる。実際、京都の上賀茂・下鴨神社は鴨川のほとりに建っているし、伊勢神宮も五十鈴川にある。神道は多神教ではあるが、その神々の中心は女神である天照大神（あまてらすおおみかみ）であり、その結果、母性文化を継承している。争いを好まず和を大事にし、自然との調和を大切にする。神道は自然崇拜の宗教であり、神＝自然＝美＝善と考える。人間は自然と一体であり、結果善である。神道は性善説を持っていると考えられる。これは母性の本質から来ている。自分の生んだ赤子を抱いたときにその子を悪人と思う母親はいない。キリスト教での「人間は罪を持って生まれる」という考えと対照的である。こうした神道の思想は老子に通じる。私見だが、恐らく老子の考えは縄文時代に日本に入り、それが縄文人の心を打ち、神道に育っていったものと考えられる。こうして日本人の心の中には老子と同じ思想が少なくとも 2000 年以上脈々と生き続けているのだ。

## 2. 若い人の為に

私は若い人の生き方には論語が良いと思っている。中でもよく引用される巻第一 為政第二 四「子曰、吾十有五而志乎學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」が今から社会に旅立つ若い人に良い。和訳は子曰わく、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳に従う。七十にして心の欲する所に従って、矩（のり）を踰（こ）えず、である。

論語は孔子の言葉を弟子達が記録したものである。興味あることに孔子・老子・釈迦は、全て紀元前 550 年頃の同時代に実在した東洋の哲学者達である。引用したこの文は、日本でもよく使われるもので、多くの日本人が暗記している。これは孔子が自分はこうだったと、自ずからの生き方を弟子に語ったものとされているので、七十歳を超えて人生を振り返って言った言葉であろう。

大学を卒業しこれから社会に出る若者達は「吾れ十有五にして学に志す」の時期を過ぎて、それぞれの専門分野に進むことを決めた人達であろう。つまりこの時点では孔子と同じ、第一の関門を突破したということになる。この皆さんが次に目指すべきは三十歳で「立つ」ことである。これは自分というもの（identity）を確立（establish）することである。自分のテリトリーを持ち、そこでは誰にも引けを取らない自負と自信を持つようになることである。必ずしも役付に出世することではない。マネージャーとして、あるいはエキスパートとしての自分を確立しなければならない。ここまではそれほど難しい話ではない。問題はこれからである。

次の四十にして惑わず、人生いくつになっても惑いがなくなるわけではないが、特に 40 歳前後には多くの人にとり深刻な惑いが生ずるものだ。欧米でも 30 代後半から 40 代前半にかけて identity crisis の時期と呼ばれていて、人生を振り返り、これで良かったのだろうかと惑いに陥る。仕事の面だけではない、家庭、生き方などにも惑いが生ずる。会社と衝突してリストラにあたりするもの、逆により自分に適した仕事を見つけて転職するのもこの時期である。孔子が不惑と言ったのは、この惑いの時期を乗り越えたという意味であろう。英語で言うと“I know what I am doing”である。孔子の時代に比べ平均寿命が大分延びている現代では、五十にして惑わずということになるかもしれない。

さて、不惑を無事過ぎ、I know what I am doing という境地に達したら、次は天命を知るになる。この頃、私の師である大徳寺の小堀南嶺老子（1992 年没）を訪ね、「和尚、不惑を I know what I am doing とポジティブに表現したら、天命を知るとの区別がつき難くなりますが」と問いただしたことがある。和尚はすかさず「不惑を無事すぎれば、その体験を基に人に教えると言うことが出来る、これが「天命を知るの意味だと思う」とすばらしい答えをくれた。つまりやっと人の指導が出来る年になるのだということだ。私が長い研究生活に終止符を打ち大学教授になることを決めたのは、この話がきっかけである。企業にいる方は教育職につかなくても、指導者としての立場を取ること出来る。

さて、論語の中で私が若い人たちに最も引用したい

文は巻第七 子路第十三 二十三にある「子曰、君子和而不同、小人同而不和」である。和訳は「子曰く、君子は和して同せず、小人は同じて和せず」である。若い人は君子の意味をご存じない方が多いので、先ずこの意味から説明しよう。君子の意味は知らなくとも「君子豹変す」という諺は聞いた人は多かろう。君子と君主を間違えている人も多いが、君子には為政者という意味はない。中国語は日本語に近いだけ返って意味を誤解するが多いので、こんな場合英語での意味を調べてみると良い。君子の英訳は gentleman、つまり紳士である。紳士という言葉は日本では死語になりつつあるが、英米では今もよく使われており、礼儀作法を心得、学識人格に優れた人、という意味に使われている。この意味を理解した上で上記の論語の文は「君子は和を保つが人と同じことをしない、つまり付和雷同をしない。しかし小人はその逆で、人と同じことはするが和は保てない、という意味になる。日本は聖徳太子以後和を大切にす国民だと言われ、皆さん「和、和」とよく言うが、実際多くの場合「和」とは「小人の和」である。「赤信号みんなで渡れば怖くない」の和である。人と同じことをしていたら安心な「和」である。逆に人と同じことをしていなければ阻害される。特に日本の現政治家の和は、小人の和そのものではないか。面白いことに個人主義の国アメリカでは、みんなが勝手なことをしているようだが、自分の属する団体、自治体、国家の為となると極めて強い和が生まれる。第二次大戦前に日本政府が冒した最も大きな間違いは、アメリカ人の持つ「和」の力を知らなかったことである。私が勤務していたベル研究所でも、研究者個人個人の独創的研究は多に奨励されるが、研究所内の和も同様に重要視されていた。所内での共同研究は encourage され、足の引っ張り合いは禁止されていた。こうして見ると孔子の言う「和」はむしろアメリカ人についてよく成り立ち、日本人の和は小人の和ということになるようだ。やはり孔子は父性文化を代表していて、キリスト教文明に相通じているようである。こうした背景もあって孔子のこの言葉は、是非是非若い人たちの心に留めておいて欲しいと思っている、そして、君子としての「和」に努めて欲しい。

さて、ここいらで孔子は卒業して老子に移ろう。

### 3. 熟年層の為に

論語を読んでいくと、各所で父性文化が現れてくる。孔子が親孝行というときは父親に対しての孝行であり、親子という場合は父親と息子のことを言っている。また孔子の謂う天はキリスト教の父なる神に相当し、一神教の色彩が強い。これに対し、老子の道德教全 81 章を読むと母という言葉は何度も出てくるが父は出てこない。孔子も老子も同じ紀元前 500 年頃の人であるが、この両者には父性文化の代表者としての孔子、母性文化の代表者としての老子という根本的な違いがある。一言に東洋思想といってもこのどちらを指すのかでまったく意味が違って来ることを知っておくべきである。孔子は天を謂うのに対し老子は地を謂う。英語圏でも、Heavenly father と言って父は天、mother earth と言って母は地を形容する。老子は自然主義者であり、無、とか、「あるがまを重視する。柔は剛に勝るといって柔らかさを重視する。

若い頃は強くて闘争的な父性文化を持つことが大事だが、熟年に達すると柔らかく、あるがまになるのが良い。孔子自身も六十にして「耳に従う」とか七十にして「矩(のり)を踰(こ)えず」とか言っている。老子の思想は道德教 81 章を全て読んで分かってくるが、これを全て紹介するスペースはないのでここで第一章を中心にして老子の考えを紹介しよう。老子の道德教第一章には「道可道、非常道、名可名、非常名、無名、天地之始、有名、万物之母、故常無欲、以觀其妙、常有欲、以觀其徼、此兩者、同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙乃門」とある。大変難解な文であるが、小堀南嶺老子の解説を基にしてお話ししよう。

「道可道、非常道」は「道のいうべきは常の道にあらざ」と読む。道は老子がもっとも基本としている世の真理及び人としての道を表す。二度目に出てくる道は「いう」と読む。この文は「私が言いたい道を『道』と言葉で言ってしまうと、本来の道(常の道)でなくなってしまう、つまり『道』は言葉では言い表せるものではない」という意味である。この文から、老子は「道德教」とも呼ばれている。

「名可名、非常名」は「名の名づく可は、常の名に非ざ」と読む。これは「物事に名前をつけて呼ぶとその瞬間に本来の物事でなくなってしまう」という意味である。つまり物事の本質というものはそれが持つ「名」

では表せない、逆に「名」とらわれると物事の本質を見失う。この卑近な例が人名である。長谷川晃というと私をご存知の方はあるイメージで私を思い浮かべらるだろうが、そのどれも私からすれば私ではない。また晃という名は両親が生後間もなくつけた名で、私を表しているものではない。物事の名はそれぞれ人によって受け取り方が異なり、結果、決して物そのものの本質を表さない。

「無名、天地之始、有名、万物之母」は「名無きは、天地の始めにして、名有るは、万物の母なり」と読む。ビッグバンで宇宙が誕生したときには「名」などはなかった、そして人類が誕生し、物事に「名」をつけ始めたのは人類が万物の母となったときである。という意味だろう。万物の母という言葉で老子はまず「母」という言葉を使い、母性の重要性を明記している。母を万物の名付けの親として見ることで母性文化を象徴している。

「故常無欲、以觀其妙」は「故（まこと）に常に欲無きもの、以て其の妙を觀る」と読む。この文は文字通り欲のない者は物事の妙を觀るという意味だが、この妙という字はまことに妙な字で国語辞典では「いうにいわれぬ程優れていること、不思議なこと、奇妙なこと、さらには寺の囲い女」など様々な意味で使われている。和語でこれを「たえ」と読むが、この場合は「不思議なまでに優れているさま」という意味になる。紀元前6世紀の老子の頃にこの字がどういう意味を持っていたかは不明だが、おそらく微妙なという意味に近いのではなかったか。欲を持たない者には物事の微妙な本質を觀ることが出来るという意味だろう。

「常有欲、以觀其徼」は「常に欲有るもの、以て其の徼（きょう）を觀る」と読む。つねに欲を持つ者は物事の徼を觀るという意味だが、徼とは物事の結果、表面に現れているもの、本質でないもの、みかけという意味である。つまり、欲を持って物事を見ると物事の結果、あるいは表面的なものしか觀ることができないという意味である。

「此兩者、同出而異名」は「この兩（ふたつ）の者は、同じきより出たるも而も名を異にす」と読む。この兩者とは妙で表されているモノも徼で表されているモノも、もとは同じモノでありながら、別の名で呼ばれている、つまり物事の妙を觀る人と徼を觀る人は同じモ

ノを別の名で呼ぶだろうが基はおなじモノである。「名可名、非常名」を例を引いて再度説明している。同じモノの妙を觀る人と徼を觀る人では同じものに別の名を用いるであろう。

「同謂之玄、玄之又玄、衆妙乃門」は「同じきものは之を玄と謂う、玄之又玄、衆妙の門なり」と読む。玄は文字通りの意味は黒である。科学的には black hole と言うべきか、実際、国語辞典を見ると老莊思想で説く哲理。空間・時間を超越し、天地万象の根源となるものとある。老子は玄という言葉で、名前を付けては表せない物事の本質を表そうとしているのだろう。

老子の第一章は難解だが実にすばらしい哲学を持っており、科学的でもある。老子はこの文を第一章に置くことにより、以下の80章を使って母性文化を基本にした哲学を展開している。孔子の論語が弟子と孔子の対話の形で弟子が記述しているのに比べ、道德教は老子自身が記したものとされている。第一章と異なり他の章は具体的で教訓的なものが多い。ここでは最後の八十一章を紹介し、老子的に見る「人生に対する教訓を紹介しておこう。

#### 老子下編 第八十一章

原文：「信言不美、美言不信。善者不辨、辨者不善。知者不博、博者不知。聖人不積、既以為人、己愈有、既以與人、己愈多。天之道、利而不害、聖人之道、為而不爭」

和文：信言は美ならず、美言は信ならず。善なる者は辨せず、辨ずる者は善ならず、知る者は博（ひろ）からず、博きものは知らず、聖人は積まず、既（ことごと）く以て人の為にして、己（おの）れ愈（いよいよ）有り、既く以て人に與（あた）えて、己れ愈多し。天の道は、利して害せず、聖人の道は、為して争わず。老子はこの章で「真实性のある言葉は美しくはない、美言には真实性はない、善者は訥弁であり、雄弁者は良くない者である。物事を真に知っている者は博学者ではない、博学者（東大出）は物事の本質を知らない。聖人（老子は君子とは言わず聖人を良く用いる）はモノを溜め込まず、人の為に使う、その結果、自らが人間として更に充実して行く。人に与えることにより自らが充実するのだ。天の道即ち老子の言う道は人々に利を与えるが害を与えるものではない。聖人の道は行動を起こすが決して争うものではない。」と。老子は

熟年者が親しむものである。ここ迄読んでいただくとタイトルの年少従孔子、年長親老子の意味がご理解いただけたことであろう。これから社会に出て行かれる諸君、あるいは熟年に達した読者の諸君、人生の参考になれば幸甚である。

今年は喜寿を迎えるのでそろそろこんな話をしても許される年になったろうと言うことだ。老子の唱える無とか、絶対性の否定は現代物理学にも繋がる思想である。とても 2500 年以上も前の人の言とは思えない。

(通信 昭和 32 年卒 34 年修士)

## 結言

今回は少し趣を変えて、孔子と老子を基にして社会に巣立つ若者達に人生の教訓を提供することにした。

## 平成 23 年 春の褒章・叙勲

このたび春の褒章・叙勲受章者が発表されましたが、判明分では、下記の方が受章されました。心よりおよろこび申し上げます。(五十音順)

植田 憲一 氏 (電気 44,46)	紫綬褒章
森田 清三 氏 (学界)	紫綬褒章
榎木 亨 氏 (学界)	瑞宝中綬章
杉田 忠彰 氏 (精密 修 34)	瑞宝中綬章
鈴木 胖 氏 (電気 33,35)	瑞宝中綬章
浜川 圭弘 氏 (電気 修 33)	瑞宝中綬章
前川 禎男 氏 (通信 29,31,37)	瑞宝中綬章
松村 文夫 氏 (造船 39)	瑞宝中綬章

新聞発表より、事務局で把握できた方について掲載しております。  
掲載が漏れております場合は、事務局までご連絡いただけましたら幸いです。